
彫刻家・山本秀明とその作品について

山本秀明の近年の作品は、いずれも集成した松の角材をチェーンソーや丸鋸などの電動工具で削った彫刻であり、自立彫刻、高浮彫、浅浮彫の多岐に渡っている。自立彫刻は人体または埴輪のような古代の遺物を想起されるものが多く、また高浮彫にも人体や顔を表したものがあふ。それらの源は横浜国立大学在学中から、1990年頃まで描いていた半具象の人物画に遡ることができよう。

山本は1950年に北海道唯一の城下町である松前町に生まれ、15歳の時に家族と神奈川県川崎市に転居した。その後、横浜国立大学教育学部美術科に進学し、砂の風景画家として知られた國領経郎(1919-1999)の教室で学んでいる。当時の横浜国立大学には学生運動の余波が残っていたものの、教育学部では専攻を超えた交流もあり、教官との距離感も近く、山本は自由に制作することができたという。1975年に大学を卒業すると、山本はかつての國領と同じように公立中学校の美術科教諭として勤める一方、半具象の人物画を描いて画廊で発表していた。

転機となったのは、1989年に自身の家を作るという欲求に突き動かされたことだろう。南アルプス、八ヶ岳、富士山を望み、自然の景観の良い山梨県北杜市高根町に土地を求めて、独りで基礎工事から始め、数年かかって3棟の建物と2階建てのアトリエを造り上げた。この高根町での建築と共に、山本の関心は絵画から木を素材とした彫刻へと移っていった。1995年頃に制作した初期の彫刻は無垢の木を電動工具で削ったり、一部を燃やしたりしているが、その行為は建築と軌を一にする自然に対する人間の干渉であり、山本の作風は生々しい削り「痕」を残すが故に、木の生命力とそれを加工する人間の技術との対照が鮮明である。その印象は、1998年頃から接着した松の角材を用いるようになって、基本的には変わらない。

集成した角材という素材と電動工具による加工が山本の個性として活かされるのは、むしろ壁掛け装飾のような抽象的な高浮彫と浅浮彫であろう。その嚆矢は2002年に制作した浅浮彫である[fig.1]。角材を貼り合わせて正方形の板を作り、その上に円を4分割して、電動工具、鑿、あるいはその両方によって、それぞれに異なるマチエールを残した作品である。丸鋸を平行に繰り返し用いることによって櫛の歯状の連続する凹凸(以下、「櫛目」という)が作られるが、山本は円を4分割して縦と横の櫛目を交互に組み合わせた(実際には縦と横に櫛目を入れたパーツをふたつずつ組み合わせた)作品を徐々に展開(技術的にも熟練)して、2011年と2013年には「Indication-Four seasons-[兆し—四季]*」シリーズに昇華させている[fig.2]。2016年と2018年に発表された「Indication-Transmigration [兆し—輪廻転生]」シリーズはその派生であり、櫛目を入れた複数の円盤を曼荼羅のように基盤の上に配置した作品である。これらの作品では、櫛目の凸を部分的に浅うことによって、凹凸の作る光と影のリズムに変化を付けている。

こうした平行する櫛目を入れた浅浮彫に対して、2011年には放射状の目を入れた高浮彫が現れる。短い角材を膨らみを持たせて、あるいは皿状に積み上げて形を整え、それに放射状の目を刻んでいる。翌年の「Sprout[芽]」シリーズを経て、2014年までにこの高浮彫の様式は完成されたと言ってよい[fig.3]。

2017年、山本はこの放射状の目を浅浮彫に導入した「Flash[閃き]」シリーズを発表した。この作品は、異なる色合いの松の角材を入れ子状に張り合わせて正方形の板を作り、その表面に浅い同心円の波を彫ってから、繊細な放射状の目を丸鋸で刻んだもので、削られた円の部分には寄木細工のような木材の入れ子の模様が浮かび、洗練された道具の扱いが生む規則的な目が、作品に空気感や透明感さえ与えている[fig.4]。2019年には正方形ではなく、中心を外して長方形にトリミングしたような作品を作り、翌年には、それを同心円の波が互い違いの向きで連続するように組み合わせた緻密な「Stream[流れ]」シリーズへと展開している[fig.5]。一方で、最近では「Leaf[葉]」、「Four leaves[四つ葉]」、「Hana[花]」といったシンプルなシリーズや、櫛目あるいは放射状の目にルーターの加工を加えた「Emotion[感情]」シリーズも手掛けている。

ここでは彫刻家としての山本秀明とその作品について簡単に記したが、他方、山本には教諭や湘南台画廊やShonandai MY Galleryでの若手作家への支援という広い意味での教育者としての一面があり、おそらくそれは山本の創作そのものにも大きくかかわっているに違いないが、それについては稿を改めたい。

*[]内は筆者による解釈である。

榎山昌夫
神奈川県立近代美術館 普及課長

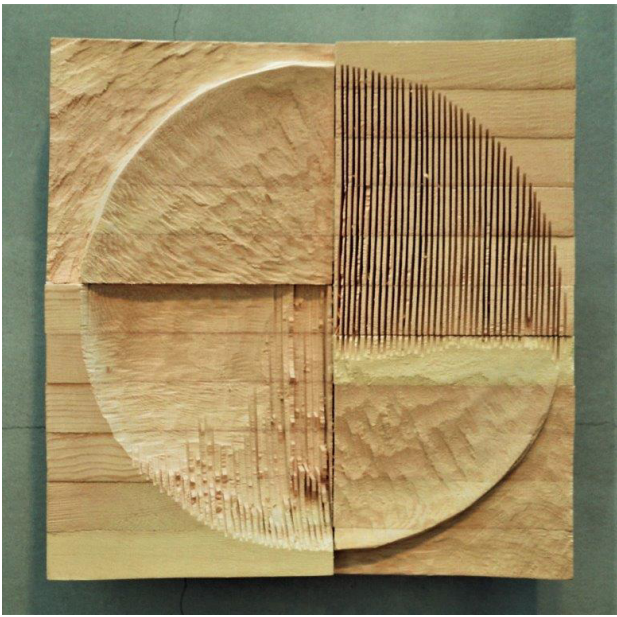


fig.1 (題名不明)2002年

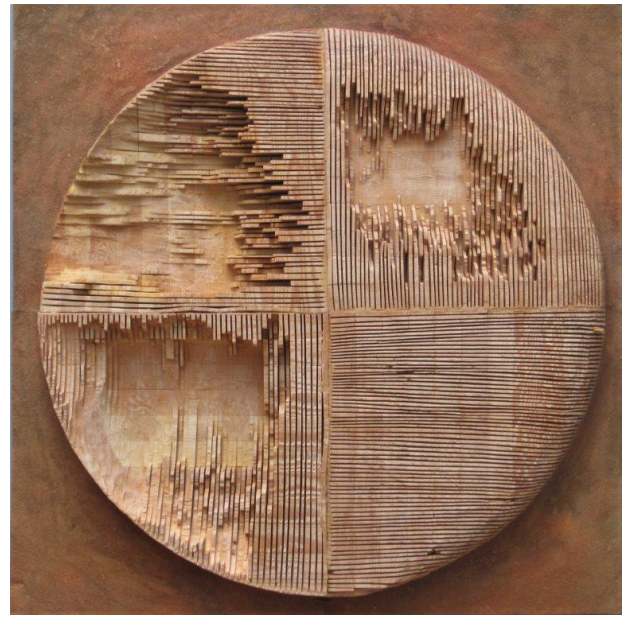


fig.2 Indication-Four seasons- 2011年



fig.3 Indication 2014年

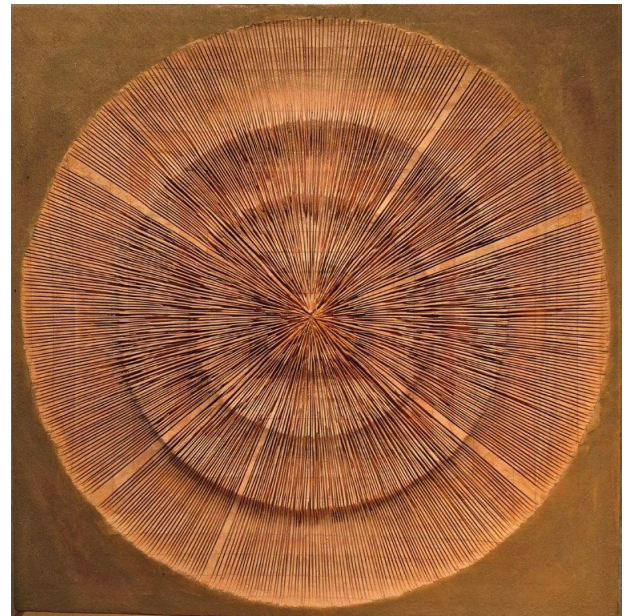


fig.4 Flash 2017年



fig.5 NAGARE-stream 2020年